
TROIKA

庵あん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TROIKA

【Nコード】

N2441Z

【作者名】

庵あん

【あらすじ】

氷の都トロイカ。年間を通して雪と氷に閉ざされた街を廻るストーリー。突然の悲劇に、喧騒で揺れる喜劇、狂気を孕んだ惨劇も、時には切ない恋愛劇も。様々な主人公たちによって演じられる、群像。或いは、物語群。私は、今日からこの箱庭を世界と呼ぶことにした。ようこそ、極彩色の劇場へ。ようこそ、TROIKAへ。

すぶらッ たつ たつ たー

Scene . 01

Trick or Violence .

「ねエねエ、おねエーさん。今夜くらいハイになって飛んでみたくなアーい？」

ぴよこん、と長い耳を立てて、その少女は愛らしく、しかし不気味に口角を吊り上げた。

彼女が両手に構える、ショッキングピンクにカラーリングされた毒々しいイングラムとシュマイザー。その甘美で情熱的な銃口は眼前の女を淫靡に舐め回す。獰猛な狼に睨まれた羊のように、エメラルドグリーンの瞳を濡らして、細身の女は恐怖に震えながら後ずさった。

しかし、少女は逃がさない。

狂ったウサギの様に跳ねて、真っ赤な両眸を輝かせて。肩を揺らして怯える若い女の前に立ち塞がる。両手に持った悪趣味なマシンガンの銃口を彼女に向けて。

ふわり、と辺りを仄かに揺らすガス灯の焰。それは淡く、雪原上の舞台を照らし出す。

昼間は華やかな街の深夜。悲劇は、誰しにも訪れる。ある日、突然に。

それだけは平等だ。

氷の街の夜には、彼女を助ける者など居ない。そして、祈る神さえも。

「来ないで……。お願い……。来ないで」

「その怯えた顔もセクシーだぜ、なーんてね。さっさと死ねよ、アバズレ」

「や……。やめて」

「さあ、冷たい唇に熱い銃口でキスしたら、トリガー引いてさっさと作りましょ、血肉混じりのポップコーンっ！」

少女はトリガーを絞った。

雪の降る夜に鳴り響くは狂気の銃声と、一瞬の悲鳴。マガジンが空になるまで、ずっと、彼女は銃爪に指をかけていた。

西部劇のヒーローよろしく、マシンガンの銃口から上がる硝煙を吹いて、ウサ耳フード付きの白いコートの内側に凶器たちを忍ばせる。その傍らには氷のように砕け散った人間だった物が、雪の上に散らかっていた。白い雪は、しつとりと血に濡れて。ガス灯の光に赤く煌めいて。

厚底の黒いショートブーツが雪を踏む。少女の右耳で、銀色のピアスが瞬いた。

娼婦が惨殺されていたくらいでは、事件にならない。いつものことだ、と警察も溜め息混じりに死体を片付ける。そういう街なのだ、此処は。

ひよい、と千切れた指先を摘み上げて、そのエナメル色の爪を眺め、少女は呟く。

あーあ、マズそう……。

やっぱり、もっと小さい子じゃなきゃダメね。

氷の都トロイカ。

年間を通して雪に覆われ凍りついたこの街では、ここに住まう人間の心も痛々しく、冷たい氷と化している。時としてその環境は、狂気に満ち溢れた童話を描き出すのだった。

S c e n e . 0 2

G o d d o e s n ' t k n o w i t

嗚呼、神よ……。

民衆は日々大変な罪を犯し続けております。人々は私の声になど耳を貸さず、自らの罪を見過ごしているのです。しかし、どうか、どうか、神よ。あなたの、その寛大な御心で彼らをお許しくださりますよう

頑丈な煉瓦造りの、教会の屋根でさえ、押し潰して仕舞うような重い雪が降り続いていた。玻璃の窓の外は白銀の世界。薄暗い、誰もいない礼拝堂で、静寂の中、黒衣の男は一心不乱に祈りを捧げていた。彼の周りを蝋燭の炎が飾る。ペリカンの象られたステンドグラスからは、宝石箱をひっくり返したような光がちらついて。極彩色の光に暴かれたのは、鮮血に濡れた銀の口ザリオと、まだ若い牧師の姿。

祭壇から流れ出す紅い血が、どろりと床に広がっていた。光沢を放つ滑らかな表面に蝋燭の淡い火を映して。

「民衆はこんな私を放っておくのです。それは大変な罪です」

右手に握ったナイフを祭壇の上に捧げられた全裸の少年の腕に突き立てる。その先端は僅かに皮膚を歪ませ、弾ける様に肉が裂けた血液が溢れる。白い肌を伝う。哀れな十代前半の少年の身体は、孔だらけだった。全身の、そこから赤い肉が覗き、血が湧き出している。既にその源泉は脈打っていない。

それが罪だということを、彼は知っている。しかし、止められないのだ。自らの内側で肥大化していく欲望と空想を。忘れられないのだ、あの日々を。

天使を探しているのです、と彼はやつれた顔に笑みを浮かべた。そして、捕らえた天使を切り刻む。何度も、何度も、吸い付くような純白の肌に刃を突き刺した。その感触に牧師はエクスタシーを感じていた。

全身に刺し傷のある少年の死体の顔は、引き攣ったような笑みを浮かべている。遠くを見つめるかの様に、虚ろに開かれた青い瞳。それは絵画に描かれる、どこか不気味な天使の様で。黒衣の牧師は慈愛に満ちた翡翠色の瞳で彼を見つめ、欲望に染まったナイフを、血に塗れた指で握り締めた。

さあ、次は何処にしようか。

「嗚呼、神よ。民衆は何故こんなにも無関心なのでしょう？」

氷の都トロイカ。

年間を通して氷と狂気に包まれたこの街では、信仰さえも凍り付かせて形を変えて仕舞う。だが、何も知らぬ人々はその歪んだ神を崇拜し続けるのだった。

Scene . 03

Death on a certain day

「お客様、チケットを」

黒く、大きな鞆を抱えた銀髪の女が、劇場の入口で肩紐を直した。彼女はエントランスを抜け、客の疎らな二階の客席へと向かう。初演にしては、大盛況だ。粗末な椅子に腰掛けて暫く待つと照明が落ち、深紅の幕が開いた。華やかな舞台が始まる。

その舞台の上、清らかなソプラノを披露する歌手を見つめながら、女は一筋の涙を流す。恨みを宿したコバルトブルーの瞳は、真っ直ぐに彼女を睨んでいた。

本来ならそこは私だけの舞台なのに、と。

何故、私が降りなきゃいけないの。

許せない。

美しい歌声と、儚げなメロディーが観客たちを魅力する。舞台が終われば、観客達は立ち上がり、惜しめない拍手と歓声を彼女に贈るだろう。そうなつてはメディアも彼女を放つては置かない。彼女は一夜にして、一躍、トップスターの称号を得る。

煌々とスポットライトに照らされるその姿は後を彼女を象徴している様だ。

そんな結末を、許せるはずもなかった。

歌を奪ったあの女を。

舞台は佳境に入る。

ふと、舞台上の女性歌手の腹部に赤い滲みが現れた。それは、ゆ

つくりと上へ移動を始める。胸をなぞり、喉から額へと。舐める様に。

レーザー照準の赤い光の点。

額の中央で、それが留まった。刹那、赤い点が縫われる。銀髪の女が構えるレミントンの銃口から音もなく放たれた弾丸に。

霧の様に紅が舞い、自らの脳と血を撒き散らしながら、今宵の歌姫は仰向けに倒れる。呆気ない幕切れだ。そのラストシーンに誰もが静止した。ただ一人、銀髪の女を除いて。しん、と場内は静まり、やがて悲鳴というスタンディングオベーションが聞こえ始めた頃、女は劇場の外にいた。エントランスに今日の日付が書かれたメモを、ひらり、と舞わせて彼女は宵闇に消えていく。

その顔に満足げな微笑みを浮かべて。

「またお越しくださいます」

氷の都トロイカ。

年間を通して気温が氷点下になるこの街では、あらゆるものが凍り付く。時に些細な復讐心さえも凍り、溶けることなく膨張し続けるのだった。

その毒に幸あれ

Scene . 04

My impure dream

幼い頃、父親は四六時中ずっと忙しそうにしていた。彼は、父親が気まぐれで娼婦に産ませた子供だったから、母親なんてものを知らない。彼に愛情を注いだのは、父親の側近と、父親のお気に入り、のコールガールだった。幼い彼を犯したのもその娼婦だ。その行為が父親の耳に入って、彼女は殺された。そんな異様な世界の中で彼は、直向きに孤独とチョコレートを啄んでいた。

いつからだろうか、父親の姿が滑稽な道化師に見え始めたのは。観客のいない無人の劇場の、暗いステージの上で踊る片足立ちのピエロ。いつしか、それが彼の中の父親のイメージとなっていた。自分ならもつと上手くやれる。窓の外、延々と降る雪を眺めて、常々そう思ったものだ。

日々、澄んだブルーの瞳の内側で彼は自らの夢を輝かせていた。

「メリークリスマス、パパ」

彼が十八の時。そう言って息子は、ラドムのトリガーを引いたと謂う。

雪降る聖夜、息子から父親への初めてのプレゼントは一発の鉛弾だった。皮肉なことに彼にそのポーランド製のオートマチックを買い与えたのは、彼を愛して殺されたあの娼婦だ。

この椅子に座って、初めて理解した。

マフィアのボスは忙しい。座っている暇なんて無いくらいだ。しかし、ピエロにはならない。父親の二の舞を踊らされるつもりはなかった。

父親にあつて、彼に足りなかったのは、人を信頼する心だ。

だから、彼は上手くやれている。

今日も彼の前には両手を縛られ、口を塞がれた男が冷汗を垂らして跪づいていた。彼がボスになることを良く思っていない派閥のメンバーだ。新しいボスの暗殺を企てたが、発覚して仕舞った。これで彼らも終わりだろう。裏切り者は、徹底的に排除しなければならぬ。これも、父親から死を以て教えられた教訓だ。今、その男の瞳には、絶望が映っている。

その男に、冷たいブルーの瞳と銃口を向ける。

死神は、彼の背後で笑うだろう。

「長い物には巻かれる。それがこの街のルールだろう？ 君は選択を間違えた。これが教訓だ」

ラドムから放たれた銃弾は、男の頭部を吹き飛ばした。

砕けたスイカのように、それは白い大理石の床に散らばる。紅と白のコントラスト。その中心で首を亡くした身体は、釣られた直後の魚の様に跳ねている。

それを見て、彼は笑った。

こんなに楽しい人生は辞められない。

彼は支配者であることに、喜びを覚えている。

「あの世で親父によろしく」

氷の都トロイカ。

年間を通して雪と氷に閉ざされたこの街では、政府の秩序は行き届いていない。結果的に秩序をつくっているのは恐怖と暴力による支配なのだった。

Scene . 05

It was cheap Life - work

中央区四番街。中央区四番街でございます。

平日の午後の、閑散とした地下鉄のホームに男が降り立った。黒いロングコートを翻しながら、野暮ったく伸ばした黒い髪を揺らし、黒ずんだ床に靴音を響かせる。ふと、彼は立ち止まって、困惑した表情でホームの時計を見上げた。

遅刻だな。

様々な人間が、白い雪の積もったメインストリートを行き交っていた。暗い顔の牧師や、重そうな鞆を抱えた女、奇抜な恰好の少女。彼らの隙間を縫うように、男は仕事場へと足を進める。

元々乗り気ではなかった。

こんなことは末端のチンピラみたいな奴らがやる仕事だ。最近是不景気だから仕方のないことなのだが……。

溜息をついて、エイプリル・ランへと繋がる角を曲がる。

彼の、今日のターゲットは長いブロンドで、右目の下に二つの黒子を持つ女。彼女を買ったクライアントは、その女に酷く恥をかかされたらしい。ビールを片手にソーセージを放り投げる程の乱心ぶ

りだった。

その程度で殺し屋を雇うとは、いよいよこの街も腐っているな。
悲観的な溜息を零す。

活気ある大通りから、寂しい路地に分け入り、いくつかの角を曲がった先。

そこは活気あるメインストリートとは違い、色気を持っていた。

“そういう場所”なのだ。煉瓦造りの回廊の、あちらこちらで荒んだ人生を小奇麗な洋服と化粧で覆い隠したコールガールが盛んに客引きを行っている。

彼女はこの辺りで客を取っているはずだ。

声をかけてきたのは、あちらからだった。一目でターゲットだと判る。想像していたよりも、彼女はいい女だった。雪の様な白い肌には赤い口紅が良く映える。彼女の外見からは、不能な男を笑う様な下品な女には見えない。あの時のクライアントの真っ赤な顔を、男は思い出した。あんな男に引っかけたことこそ、何よりの悲劇だろう。

しかし、これは仕事なのだ。同情などできない。

前金は貰っている。

男はコートのポケットに手を伸ばした。

指を架ける。

「ねえ、オジさん、少し遊んでかない？」

「悪いな。持ち合わせがこれしかないんだ」

躊躇うことなく、デザートイーグルの引き金を絞った。銀色の銃身から放れた弾丸は、女の胸を貫通する。煉瓦造りの街を銃声が伝

った。しかし、誰も気に留めることはない。“そういう街”なのだ。胸から血を流して倒れた女の首筋に手を当て、男は脈を診る。死んだのを確認すると、黒いコートのポケットに手をつ込み、憂鬱そうに彼は其処を後にした。

地下鉄を待つホームで、彼は独り呟く。

「交通費出るかな」

氷の都トロイカ。

年間を通してこの街を覆う雪はその街の住民の心も覆っている。此処では助けを求める声さえも雪が遮断して仕舞うのだった。

Scene . 06

Neighbors in coffin

冷たい肌の人間だけしか愛せない人種の話、場末のバーで語られたことがある。

只その時は、そんな世界もあるのだろうと思っていた。人間の狂気に色めいた都市伝説なんてものは、教訓染みた話の種として広く一般的であるからだ。特にそんなものと掛け離れた世界の中では。

東の空が白く縁取られ始めた時、彼女は列車のドアを潜り、薄暗いホームへと降りた。誰もいないホームには靴音がよく響く。まるでこのホーム全体がラッシュの喧騒に恋をしているように。朝方の張り詰めたような冷気に、コートの襟を立てる。吐息の白さに遠い

故郷を思い出しながら、無人の改札を抜けた。

潜伏には、良い街だと聞いていた。

長い階段を昇った先は、雪に覆われた世界だ。今まさに、地上に降り積もろうとする雪が頬を掠めていく。

行き着く先は雪の絨毯。ふわり、と重なって。

雪の様に白く、冷たくなった人間の肌は、こんな温度なのかもしれない。実際には、外気温に近づくものなのだろうが、血が通わないと聞いただけで絶対零度をイメージしてしまう。それほど私の中の死というものが、官能的で抽象的で刹那的な、鋭さにも似た美しさを孕んでいるのだろうか。触れただけで消えてしまいそうな儚さと脆さが、何とも心地良いのだ。

その芸術とも言える魅力が私を強く惹きつけている。

そう解釈すれば、私がこの街に移り住もうと決めた理由にも成り得る。この御時世だ。身を隠す場所なんて、いくらでもあった。この街のような排他的な世界では、人間の空想が肥大化しすぎてしまうものだ。殺戮と暴力の横行する、管理者のいない街。私は、私の唯一の趣味と言えるそれを止めるつもりはなかった。

この街なら、思う存分、芸術に没頭できそうだ。

本来は、芸術的でも何でもないのであるかもしれない。だが、棺の中の隣人に恋した私は、引き返すことが出来ないステージに上がってしまった。シンデレラに恋した王子も、ガラスの無機質な冷たさに惹かれたのだらう。白雪姫を見初めた王子も、その死体じみた彼女の魅力に心を奪われたのかもしれない。

同じなのだ。

何故なら、私は死体しか愛せないのだから。

雪の様に白くなった肌にメスを這わせることが、氷の様に冷たい軀の中に包まれることが、私にとっては何よりのエクスタシーだった。灰色めいた紺色の空を見上げながら、女は紫煙を吐いた。

薄明に、赤い焰がひとつ。

夜明けを待っている。

氷の都トロイカ。

年間を通して雪と氷に覆われたこの街は、そこに存在する全てのものが儚く映る。時としてそれは現実では到底覗くことが出来ない空想を作り出すのだった。

神に見放された日

Scene . 07

Pumpkin - Gun / Go Go !

ふわふわ、と粉雪が舞う。

雪の和らいだ、白昼の北區画は平穩というベールを纏っていた。子供たちが新雪の上を走り回る。笑い声が響き、光に溢れた街の姿。言わばそれは要塞であり、同時に人々の冷え切った心を暖める暖炉でもあった。しかし、それは狂気を隠すための仮面でもあるのかもしれない。毒蛇は何処に潜んでいるか判らないからこそ、恐怖なのだ。

そんな光ある路地の回廊。

昨晚、積もったばかりの新雪の上に足跡を刻むあどけない少女が、何かにぶつかった。ひよい、と彼女が見上げると、ふわふわの白いコートに身を包んだ少女が彼女を見下ろしていた。彼女は少女の視線まで屈んで、やさしく、微笑んだ。

「元気だね、お嬢ちゃん」

「ごめんなさい。おねーさん」

「大丈夫だった？」

「へーき！」

「気をつけてね。それと一人で遊んでちゃ危ないよ。そうだ！お

姉さんと遊ぼうか」

「うん！」

「その前に聞きたいことがあるの」

「なーに？」

「君は何歳？ 身長は？ 体重は？ 血液型は？ 好きなものは？
利き腕は？ 運動好き？ 睡眠時間は？」

「えーと、えと……」

「ねえねえ、君はオイシイ？」

血の様に紅い目玉が、少女を捕らえていた。
蛇の様に。

彼女は怯える隙もなく、幼い少女は立ち尽くす。イングラムの銃口を少女の額にそつと添えた。ニツコリ、と彼女は微笑み、そのまま残酷にトリガーを絞った。炸裂する銃声。ショッキングピンクの銃口から次々と発射される銃弾が、少女の小さな頭部を粉碎していく。脳髄も、頭蓋骨も、目玉も、何もかもを引き裂いて。

撒き散らして。

吹き飛ばして。

血肉は真っ赤に飛び散る。

つつい可愛い子にはキスしたくなるの。

こんなに美味しそうな子を、ひとりで遊ばせるなんて罪よね。

背中のウサ耳フードをふてぶてしく揺らして彼女は陽気に笑っている。白いコートの悪魔がイングラムのトリガーから指を離れた時

には、あの愛らしい少女の頭部は下顎から上の部分が消滅していた。鮮血に濡れた新雪が、陽光の下でキラキラと艶めく。

その神秘的な惨劇の後で、悪魔は美味しそうな死肉を漁るのだった。

「そこで何をしている！」

毒蛇が鎌首を上げる。

氷の都トロイカ。

年間を通して雪に覆われたこの街では食料の確保が困難である。

そのため、住人は隣人にさえ食欲を掻き立てられるのだった。

Scene . 08

Fried Kitchen

今、通り過ぎようとしていたイタリアンレストランから響いて来た銃声に、思わず男は身を屈めた。強盗か、食い逃げか、マフィアの抗争か、はたまた大袈裟な痴話喧嘩か……。店内の状況を考えれば考えるほど、その候補は増えていく。世界平和なんて言葉はどの辞書にも載ってない。此処はそういう街なのだ。ある朝、突然自宅の庭先で銃撃戦が始まってでも不思議ではない。

何にせよ、撃ち合うなら他所でやってほしい。

また行き着けの店が潰れて仕舞う。煉瓦の壁にもたれながら、紙

タバコをくわえ、黒いコートの男はマツチを擦った。炸裂音が響く。刹那、顔の真横の窓が吹き飛んだ。白い雪に、砕けたガラスが突き刺さる。そこから、悪趣味な色のイングラムとシュマイザーを両手に携えた白いコートの女が、無邪気に笑いながら飛び出した。ふと、彼女は右を見て。

「ヘイ、旦那。こんなところで一服してたら頭ぶっ飛んじゃうぞん」

「これ、君がやったの？」

「私はお食事中。こんなところで撃たれる因縁はないね」

「……そ。なら、さつさと片付けちゃってよ。これから食事なんだから」

「アッハハ！ 災難だね、おっさん」

「まったく。ここんとはツキがない」

「期待しててよ。本日のメインディッシュは鉛弾にございますってね。付け合わせのスープに脳ミソ入ってるかも！ ミソ・スープってやつ？」

イカれてやがる。

やれやれ、と男は新しいマツチを擦った。

女は窓から中を覗き込み、トリガーを引き続ける。デフォルメされたウサギの顔のフードの耳が彼女の背中でふてふてしく揺れていた。そんな彼女を横目に、彼は空を見上げる。珍しく青空が広がっ

ていた。こういう日は決まって厄日なのだ。晴れているのいいことに、物騒な奴らまで子供みたく外に出たがる。

紫煙と共に、彼は溜め息を吐いた。

そんなとき、彼の隣で撃ち合っていた白いコートの少女が男の肩を突く。

「RPG」

二人の顔が青くなる。

脱兎の如く、彼らは窓から跳び退き、地面に伏せた。その窓から、ロケット弾が勢い良く飛び出し、向かいのカフェを直撃する。お気の毒に、大損害だ。

全くツイていない。やはり、厄日だ。そう思わなければ、やり切れない。

そもそも、室内で対戦車用の兵器をぶっ飛ばす奴の気が知れない。やはり、イカレてる。

「お返しだー！ 三時の方向、視界は良好。さらば、お気に入りの味！ グッバイ、イタリア！」

どこから持ち出したのか、頭のネジを落とした少女はカール・グスタフ無反動砲を構えていた。しっかりと肩に担いで、地面に膝を立てて、よく狙って。そう、完璧。

硝煙立ち込める店内に向けて、その凶悪な弾頭を発射した。

ある晴れた日のキッチンストリートの、イタリアンレストラン、オニオン・ジャック。

轟音が轟く。

爆煙と共に色々なものが窓やドアから飛び出してくる。
ナイフやフォーク、砕けた皿に、手首や、脚、首もだ。

「お嬢ちゃん。それは戦車に使うものですってママに教わらなかった？ 御蔭で終わったみたいだけどさ」

「手榴弾より良心的でしょ？」

「……まあね」

氷の都トロイカ。

年間を通して白夜の多いこの街では、昼夜の感覚が曖昧になる。
時としてそれは夜の魔物を光の中へ歩ませるのだった。

S c e n e . 0 9

S h a n g r i - L a

「私が殺しました」

放たれては落ちる雪に、ふと、自分自身を重ねることがある。そういう存在だからかもしれない。そう、マフィアなんてものは、殺して、殺されるといいうレールの上に乗っている。シカゴのアル・カポネの様に華やかに悪党を気取り、安らかにベッドの上で死ねる人

間は稀だ。

結末はいつも、残酷だった。

マティーニのグラスを持ち上げる。彼の左手にはラドム。ウヰスキーとリボルバーなんて、ウェットな生き方はクールじゃない。ドライでなければ、この世界で生きるのは不可能だ。それに、開拓時代の英雄物語なんてものは、スクリーンの中だけの御伽話である。ゴールドラッシュに誘われ、荒野を駆け回る時代ではないのだ。

現に、宙を舞っている間の雪は、渴いている。

それがどうだ。

地に落ちた瞬間、あんなに固くなって仕舞うではないか。

「誰に頼まれた？」

「答えられません」

「そうか。何故だ」

「殺し屋ですから」

「上出来だよ、君」

仕事とは、そういうものでなくてはならない。脚を組み直した。喉が、渴いただろう。

彼は、目の前の暗殺者にカクテルグラスを手渡す。震える指がそのグラスを掴んだ。

直後、ガラス片が四散する。

男はラドムの銃爪を引いたのだった。冷たく、白い大理石の床に、胸を撃ち抜かれた死体が転がる。散花したガラス片が黒いスーツを

飾った。それは薄暗い室内の、オレンジ色の光の中で、ダイアのように輝いている。

使い捨ての殺し屋に贈る花束にしては……。

「豪華すぎた、か」

ひとときの悲しみも直ぐに凍りついてドライになる。そうなのは、また繰り返すのみ。人々は再び武器を取り、流血を生む。そういう世界なのだ。

常に、この街は、渴いている。

氷の都トロイカ。

暴力の支配するこの街の実力者は、常に命を狙われている。時にその恐怖は、心を凍らせ、氷のような冷たい処刑を生むのだった。

フライデー・ナイト・フィーバー

Scene・10

Public garden

礼拝堂の扉を開けて、最初に目に入る花壇の花々を彼女は眺めていた。

この街で、こんな場所で、こんなにも鮮やかな花が咲いているなんて。グレーのコートを纏った女は瞳を輝かせた。最初は、噂通りの、物騒な街だと思っていた。否、今もその印象は変わっていない。けれど、この花たちを眺めていると、救われたような心境になった。凍り付かない花もあるのね、と。

今では、死者に供える花も、造花ばかりだ。凍らない様に。元から凍りついているかの様に。

ひとつ、靴音が聞こえた。

女は顔を上げた。

懺悔室から出てきた、猫背で不健康そうな牧師と目が合う。長く、黒い髪の女は青い葉脈の透ける白い顔に笑顔を浮かべた。

「礼拝堂の中に花壇なんて素敵ですね、牧師さん」

「こんにちは。本日はどうなさいました？」

「ああ、大した用では……。最近、この街に引っ越してきて。家の近くに教会があったものですから」

「そうですね。僕の趣味なんですよ、ガーデニング。この通り、

あまり人は来ないもので」

「確かに、もう流行らないでしょうね……」

「神も、花も。いつの間にか、人の目には留まらなくなって仕舞いました」

神への信仰心を、この街の住人は持たない。

何度祈っても、結局、救われることはないのだ。人々はそれを理解していた。死という不幸は、唐突に誰かを驚掴みにする。それは隣人かもしれないし、自分かもしれない、また、自分の愛する誰かかもしれない。信仰する神が違って、或いは、神を信仰していなくとも、その結果は誰しにも、公平に訪れた。神に祈る暇があるのなら、愛する家族と少しでも長い時間を過ごしたい。それが、この街の住人の囁かな願いだった。

あの戦争は、何もかもを変えたのだ。

そして、凍り付かせた。

気候も、世界も、人の心も……。

「すみません。お名前を伺ってもよろしいですか？　僕はロンメルと言います。ファーストネームはエルンスト」

「ヘルガ・ダールベルグです。また来ても？」

「ええ。金曜日の夜以外なら開放しています。いつでもお越しください、ダールベルグさん」

「それでは、また」

「」機嫌よう、あなたに神の御加護を」

礼拝堂を出た女は、振り返って、教会を眺めた。

あの場所で嗅いだ、昔の職場の懐かしい匂いを彼女は敏感に感じ取っていた。そう、あの手術室の、噎せ返る様な、血の匂い。

白く、雪が降っている。

氷の都トロイカ。

荒んだ街の中でも、花は咲く。人が、自身の短い一生を狂気で染め上げる様に、その花たちも狂った様に、次々と花を開くのだった。

S c e n e . 1 1

金曜日は定休日です。

今日も銃声と悲鳴が聞こえるトロイカ西區画。改装中のイタリアンレストラン、オニオンジャックの向かい側。こんな昼間から飛ばしちゃって、と呆れながら、その喧騒を遠くに、銀色のスプーンでスープをひと掬い。

ニンジンなんて絶滅しろ、そんなスローガンを掲げた店主の営むカフェ・トムキャロット。そのカウンターでランチをしている少女の後ろを、黒いスーツの物騒な男たちが駆け抜けていった。活きの良いのが四、五人。手に手に銃を抜いて。

この西区角の中心部はキッチンストリートと呼ばれ、市場を中心

に飲食店や精肉店、ベーカリーなどが軒を連ねている。まさに民衆の、この街の台所なのだ。そのキッチンストリートのと真ん中。人々の行き交う大通りで、右肩から大きな鞆を下げた銀髪の美女が黒服の男たちに追われていた。

銃声と硝煙に彩られたいつもの風景。この街の日常。至って極々普通。逃げる女と追うマフィア。獲物を捕まえたきや獲物を振り回せ。そんな教訓染みたジョークも存在する。

たまたま流れて来た銃弾が、スープの皿を砕いた。

雪色のコートにポタージュの染みが飛ぶ。

流れ弾で弾けた料理は取り替えない。そんなルールがいつの間にかこの界隈の店には定着していた。カウンターの向こうの店主を見る。知らん顔だ。

少女は銀色のスプーンを静かに置く。

「待てコラア！」

一発の弾丸が『ハイドアウト』と書かれた小さな看板を撃ち抜いた。鉛弾が飛び交う中を走りながら、銀髪の女は黒いコートの内側に手を伸ばす。本来の、自分の美学とは異なるけれど、こういう状況では仕方がないわ。後ろの連中は煩すぎる。やはり、仕事は選ぶべきだった。お陰で大迷惑。

彼女が取り出したのはスターム・ルガー。アメリカ生まれのオートマチックのセーフティーを外して。立ち止まって、振り向いて。狙いを定めて。

引き金に指を掛ける。

その時、スターム・ルガーの銃口の前にウサ耳フードが踊り出た。その手にショッキングピンクのイングラムとシュマイザーを構えて。真っ赤な瞳を輝かせて。

「こちららお食事中だコラァ！ 後にしろお！ 鍋ん中放り込むぞ
テメーら！」

「マッド・バニー！？ な、テメーじゃねエーよ。後ろだ！ 後ろ
！」

「あ、はい」

ぽかん、と少女が振り向く。

そんな勘違い兎の目の前。

銀髪の女が銀色の拳銃を構えて、彼女を睨んでいた。しばし、二人は見つめ合う。何か妙に納得したように少女は頷いて、さっと横に一步退いた。そして、黒いスーツの、柄の悪い男たちを指差す。男たちは啞然としていた。

少女は、にこやかに。

とびっきりのスマイルで。

「どうぞ。お姉さん」

殺っちゃって。

消音構造の施されたスターム・ルガーの口から音もなく吐き出された弾丸は、追っ手たちを貫いていく。銀色の銃身が眩しい。トリガーを引く度に、次々と彼らは倒れていった。

死体が一、二、三、四……。

思わず、少女は見とれていた。お見事。ここまで腕が良くて、冷

淡で、正確な撃ち手はそうは居ない。これなら、暫くは退屈なくて済みそうだ。不気味に、彼女の口角が吊り上がった。

追っ手を撒いて、背を向け歩き出す黒いコートの女の背中に、彼女は声をかけた。

「お姉さん何したの？」

銀髪の女は何も言わない。その代わりに、ふわり、と振り向いて、スターム・ルガーの銃爪を握った。至近距離から発射された二十二口径の鉛弾が、少女の腹部を貫通する。女は弾倉が空になるまで、引き金を絞った。コートに赤い染みが飛ぶ。

あ……、と少女は短い悲鳴を上げて、真っ白な雪の上に崩れ落ちた。

少女の紅い瞳が空を仰ぐ。その中を灰色めいた雲が流れていく。空になったマガジンを取り替えて、冷酷に踵を返した女。銀色の髪が風に靡いた。その背後で突然、ケラケラと笑い声が響く。振り返ると狂ったように、たった今殺したはずのイカレうさが笑い転げていた。

ぴょん、と跳ね起きる。

「ぎゃんねえーん！ 私、他のより頑丈なのなの。だからね。死なないんだよ。ほらほら」

少女は白いコートのボタンを外し、開いた。星の様に青い瞳が震えた。コートの中を見た女は目を見開き、すぐに視線を少女の顔に移した。真っ赤な両眸が白い肌の上に浮かんでいる。

狂った白兎は、少し頭を傾けて。
とびつきりのスマイルで。

「驚いた？　ねエ、お姉さん、仲良くしない？」

呆れた様に、或いは、諦めた様に、溜め息をついて。

銀髪の女はメモ帳を破き、一枚の走り書きを手渡した。

少女がそれに目を落とす。オリガ・ロックハートという彼女の名前と、彼女のメールアドレスがそこに記されていた。少女はそれをコートのポケットに突っ込む。

少女に、女は一度だけ微笑んだ。

刹那、スターム・ルガーのトリガーを絞る。

弾丸に心臓を撃ち抜かれてもなお、狂ったように、少女は笑っていた。

「私はイルゼ・クレセント。よろしくね、オリガさん」

氷の都トロイカ。

マフィアやギャングが支配するこの街では、虐殺と暴力が横行している。時にその衝突は惹かれ合い、運命的な出逢いを生むのだった。

晴れ後、雪

Scene・12

Sadistic Sunday Shamrock

「おい！ 聞いてくれ。シャムロックが吹っ飛んだ」

乱暴に駐車したパトカーから転がるように降りた男が、無線に向かって叫んだ。

珍しく雪の降らない晴れた日のこと。

彼の頭上では中央区のファッションの中心街エイプリル・ランとハンゲマン通りが交差する四つ角の、その一角に聳え立つ巨大ショッピングモール、シャムロックが久しぶりの青空に向けて黒煙を上げている。爆弾か、ロケット弾か……。しかし、大惨事には変わらない。何があつた、とノイズだらけの無線が問い掛けた瞬間、ビルの中から二回目の爆発音が響いた。

反射的に男が身を屈める。

ビルの中階から碎けたガラスや瓦礫が路上に降り注ぐ。そして、シャムロックの中からは悲鳴と共に、日曜日の買物客が飛び出した。

「と……。兎に角、早いとこ応援を寄越してくれ！ どうかのイカレ野郎がデパートの中で花火してやがる」

「ねエねエ、おにーさん。それ貸して」

「あん？」

警官が声のした方を見た。

彼はブルーの目を見開く。彼の視線の先にはショッキングピンクのイングラムを構えた可憐な少女が佇む。マシンガンの銃口を警官の額に突きつけ、にこやかに彼女は微笑んでいた。引き金に指をかける。

引き攣った笑顔で警官は無線を少女に渡した。

少女の緋色の瞳が、悲鳴と銃声で揺れるシャムロックを見上げる。

「ヘイ。良く聞けスピーカーの前のポリス共。素面でパトロールなんてよくやってられんな。つか、シャムロックは私の仕事になった。首突っ込んだらリアルでギロチンだかな」

そう言い放つと彼女は無線を放り投げた。雪の上に落ちた無線機からは何か声がしていたが、少女は気にする様子もなく、高層ビルのエントランスへと足を進めている。

コミカルなウサギの顔を模したフードが少女の背中で長い耳が揺れていた。ふてぶてしい後ろ姿を見ながら、バチバチと音を立てる無線機を拾い上げる。そして、今あったことを報告しようとしたその時、彼のこめかみに鮮やかなピンク色の銃口が突き付けられた。ゆっくり視線を向けると、先程の狂った白兔が、微笑んでいる。再び、引き攣った笑顔の警官は無線機を少女に手渡した。

「ヘイ。ポリス共。言い忘れた。私はマッド・バニー。この街の最大火力だ。テメーらは死体袋の用意でもしてな」

数分後、静かになったショッピングモールでは、警察による遺体回収作業が行われていた。その様子をあの不運な一台目のパトカーにもたれて眺めながら、ご機嫌な白兎はイチゴ味のジェラートを頬張る。

数秒後、彼女は頭を抱えながら雪の上をのたうちまわっていた。

氷の都トロイカ。

日々、凶悪事件が発生するこの街では、警察組織の処理が常に遅れている。時として被害者は、非合法的始末屋に処理を任せるのだった。

Scene . 13

Simple shoot

慎重に、ベレッタのスライドを引いた。

大通りを脇の路地へ入った先、幾つもの氷柱の下がる裏路地の軒下で、彼は音も無く銃を構えた。黒い銃身は真っ直ぐに。彼の両眸とベレッタの銃口は、黒いコートの男へと向けられている。シンプルな割に、額の大きい仕事だった。一人消せば、一生遊んで暮らせる。そして、今、トリガーを引けば、それが手に入る。もうすぐだ。郊外の、安全な地域に大きな家を買って、後は好きなことをして過ごせばいい。退屈な人生を送ればいい。

パーティーだって開ける。ストリッパーも呼べる。

何、躊躇うことはない。

一思いにトリガーを絞れば、それで幸せになれる。

「君、この仕事はいつから始めた？」

黒いコートが翻る。

同時に、銃声が聞こえた。その男は銀色のデザートイーグルから放たれた弾丸は、殺し屋が右手に構えていたベレッタを粉碎していた。

報酬の割りに、簡単な仕事のはずだった。組織を外れた殺し屋を消すなんて、よくある仕事だった。これまでも、何度かそういう殺しはあった。いつも通りのはずだった。今回の仕事で引退するつもりだった。

何故だ。

ブラウンの瞳を左右に泳がせて、彼は思考する。

何故、こんな状況に置かれているのか。

「クライアントは誰だ？ 鷲鼻か？」

「さアな。俺は人を殺せと言われたただけだ」

「クライアントを教えてくださいれば、命だけは助けてやるよ」

「それは……」

「どうした？」

「……やめとくよ。結局、失敗した殺し屋にあるのは終わりだろう？」

「解ってるじゃないか」

「俺だってチエリーじゃない」

「俺は囁かな希望に賭けてみるのも、いいと思うがな」

白く、溜息をついた。

氷柱の先端から雫が落ちた。それは、白い雪の上に小さな穴を空ける。弾痕の様に……。殺し屋なんて職業を続けていれば、いつかはそうなる運命なのだ。額か、心臓か、その結末は二つ。そんな職業だ。ベレッタなんてスマートじゃない。最近は、妙な奴ら　狂った奴ら　も増えている。核武装をしても足りないくらいだ。

次は、上手く殺せよ。

銀色の鷲が鳴く。

たった一発。赤い屋根から、カラスが一羽、飛び立った。

鋭い嘴が、男の心臓を貫いている。水滴が雪に空けた穴のように。

「どっちにしても、死ぬんだけど、さ」

氷の都トロイカ。

大小様々な悪党が入り乱れるこの街に失業者はいない。時にそれは、人を殺せば生きていけるといって、遣り甲斐を生むのだった。

ふと、腕時計を見て溜め息を漏らす黒いジャケットを纏った男は、紙タバコに火を燈した。フィルターを噛む彼の足元。赤いスニーカーの傍には、何本もの吸い殻が転がっている。駅の構内は閑散としていた。

無理もない。こんな時間だ。列車が遅れているのかもしれない。二時を指していた短針を、後ろから来た長針が追い抜こうとしていた。苛立ち混じりの紫煙が燻る。

一度目は目を閉じよう。

彼は短気ではなかった。寧ろ、自分では気の長い方だと思っている。デートの待ち合わせに、相手が遅れたくらいで機嫌を損ねるような人間ではない、と。短くなった煙草を靴で踏み消すと、再び、腕時計を見て、舌打ちした彼は紙タバコに火を点けた。

その時、ホームに風が吹く。紫煙が舞った。

鉄輪を軋ませながら、冷やかな風を纏った銀色の車輛がホームに滑り込む。

「ごめーん！ 待った？」

列車から降りて、彼に笑顔で手を振る女性のグレイのコートの胸が赤に染まった。

女が、その場所に崩れ落ちる。悲鳴が上がった。頭を押さえる彼の左手には、硝煙の香るグロッグ。いつもの、悪い癖だった。

指先で、こめかみを押さえる。眉間に皺が寄る。

深呼吸する様に、紫煙を吸った。

ある時から、彼は頭痛に悩まされていた。苛立つと直ぐに頭が痛み出す。それさえもストレスで、更にきりきりと彼の頭を縛り上げていた。

医者には行った。

原因はストレスらしい。気にしすぎだと言われた。神経質な人間にはよくあることだと言う。人間は方程式では解けないよ、と彼は微笑み、俺に鎮痛剤を渡した。ヤブ医者だ。彼はそう思った。だから、治療費の代わりに、彼は鉛弾を、その医者の頭に撃ち込んだ。白い錠剤が、白い泡となって水に溶けていく。

駅舎の外は、ガラスの内側の様に一面の雪化粧。赤く縁取られたレンズに映る閑散とした午後の街の姿。

靡いた赤い髪が、白い雪を弾く。

氷の都トロイカ。

周囲を氷に閉ざされたこの街では、そこに住まう人間にも壁ができてしまう。時にそれは、余りにも残酷な城壁へと結晶化するのだ。つた。

ゆめになれば

Scene . 15

Morphine trip trip trip

「ねえ、私の頭さ。オカシィンだつて。先生が言つてたの」

赤い血が白い肌を這う。

撃たれた太腿を引きながら、ゆっくりと女は立ち上がった。光を呑むような、黒い髪を揺らして。糸の切れた操り人形みたく、狂つて。こくり、こくり、と揺れながら。

影の存在しないトワイライトゾーン。

薄明の街。真っ白い空から、真っ白な雪が、白に霞む街へと墜ちてゆく。そうして、地に辿り着いた雪が、折り重なってゆく。そんな世界は、堪らなく美しい。狂って仕舞いそうなくらい。

パタパタ、と女の足から赤い血が零れた。ゆっくり、と。ゆっくり、と彼女は足を踏み出す。彼女から点々と続く血痕を辿った先には、斬殺された死体が散らばっていた。赤い肉と白い骨の断面がマール模様を描く手首や、下半身と生き別れて臓物を投げ出した首無しの胴体、縦に肉のファスナーを開けられて中身の飛び出した着ぐるみ……。

真っ赤に、凍りついて。

愛おしい程に。

彼女は刀の切っ先を、血走った真っ赤な瞳を、目の前の若い金髪の男に向ける。狂って仕舞いそうなくらい冷たい殺意を持って。艶やかに。

咄嗟に男は女の右肩を撃った。

白い朝に散った紅。

赤い血が、白い雪によく映える。白の中に染み出した深紅は、溶け合うことなく、そのまま凍り付いた。それでも彼女は倒れずに、白鞘の日本刀を左手に持ち替えた。赤く、血に濡れた刃が瞬く。陽炎の様な、得体の知れない彼女の狂気に、男はたじろいだ。引き金にかけた指に迷いが生まれる。人が初めて、それを目の前にしたとき、誰しもが抱く疑念なのだ。

果たして、この弾丸なんかで奴を殺せるのか

「う、動くんじゃないエ！」

「どうして」

「……は？」

「早く撃ちなよ。ほら、バーンってさ」

不死身と呼ぶ人間もいる。

案外、その得体の知れない恐怖への従順な信仰心は間違っていない。しかし、妄信は時に殉教という悲劇をもたらすのだ。人は、決して神や天使に対抗できないほど、無力ではない。それを知ってもなお、信仰を続けるのであればその人間は幸せ者だろう。神のために死ぬるのだから。自分が信じた存在に殺されるのは本望というものだ。

ロザリオに架けられた罪人の様に。

或いは、死刑の執行人みたく。逆手に持った日本刀を振り上げた。コートの袖から半分だけ覗く、彼女の左腕に刻まれた翼竜は蝙蝠めいた翼を大きく広げている。黒髪の少女は、幽かに笑って、哀れ

な罪人の胸に刃を突き立てる。
白に舞って、血飛沫。

「アハハ、痛いよ……。こんなに血もたくさん。お薬が必要ね」

その女は赤いコートの内側から、注射器を取り出すと、自らの太腿に突き刺した。微かな悲鳴が、彼女の口から漏れる。

それも、すぐに溶けるような喘ぎに変わった。

朝陽に融ける、魔法みた。

氷の都トロイカ。

年間を通して氷に封鎖されたこの地には、死なない人間が存在すると謂う。時にそれは、怪談めいた噂として語られるのだった。

Scene・16

Hey・Taxi!

ガキの頃は庭に干された白いシーツをマントみたいに羽織って、いつもブラウン管の中のスーパーヒーローを気取っていた。誰かを守るために戦い続ける彼らは、それがフィクションだと気がついてからも、俺の中のヒーローだった。そんな俺が警察官になろうと考えたのは不思議なことではない。友人には、自殺行為だと止められたが、俺は今でもよろしくやっている。俺は悪人を捕まえるために仕事をしているわけではない。

だから、今も立派なお巡りさん　巡査　という訳だ。

この前、イカれた女にイングラムを突き付けられた時は冷や汗をかかされたが、あんなことはそうそう起きるものじゃない。

運が悪かっただけ、そう思っていた。

「ねエねエ、おにーさん。オニオン・ジャックまで乗せて」

そいつはあの時と、まるで同じ様にショッキングピンクのイングラムをアイスクャンディーみたいにちらつかせて、満面の笑みを浮かべている。悪夢だった。

最悪だ。

溜め息をついて、彼はブラウンの髪を掻き上げた。

中身は別として、外見は何ともかわいらしい女の子だが、ドライブの相手としては最悪だ。今も彼女は助手席で手榴弾をお手玉にしながら、彼を手玉に取っている。

「おにーさん。お名前は？」

「ジャンカルロ・メルカダント」

「ジャンでいい？」

「ああ、好きにしてくれよ」

「ねエねエ、この前のシャムロック。どこの仕業だったの？」

「あー、あれ。声明出した組織は無し。今のところ、薬のやりすぎ

で狂った奴らの乱射事件って扱いだ」

「まったく。これだから軍警は……」

「すみませんね。どつかの誰かさんが実行犯も買い物客も見境なく射殺しちゃったもんで。どの死体の実行犯かも不明。だから、今は目撃証言集めてるよ」

「ほんと。どこの誰だろうね、それ。可愛いけど困った奴だな」

「……聴取くらいさせろって話。あ、そーいえば、何人かは死体の腕に竜の刺青があったらしくてね。多分、それが乱射魔じゃねエーかってさ」

「へえ……。ドラゴン、のね」

「心当たりは？」

「……ねエーよ」

雪の落ちる西區画キッチンストリートのイタリアンレストラン、オニオン・ジャックに一台のパトカーが乗りつける。その助手席からウサ耳フードの少女が降りた。

店に入る前に彼女は運転席の窓を開けさせ、車内の警官に告げる。

「地下の奴ら、あたってみた？」

「いや……。つーか、手エ出せないよ、あそこは」

「あつそ」

「おい、マッド・バニー。何か判ったら教えてくれよ。これ、俺の番号」

「イルゼでいーよ。じゃネ、バイバーイ」

氷の都トロイカ
暴力が支配するこの街では、道を歩くあどけない少女にさえ注意しなければならぬ。時として油断は、最悪の悲劇と、屈辱的な従属を生むのだった。

Scene・17

ゆりかご

「命は何故美しいのでしょうか」

「散るからではないですか？」

「儚さ、ということですね？」

「ええ。そうかもしれません」

にこやかに、牧師は答えた。

新雪、降り積もる深夜。

蠟燭の炎が、暗夜の中に教会を浮かび上がらせる。その淡く、滑らかな光は、いつかの時代に失われた救世の希望に似ていた。窓の外、闇の縁。ゆつくりと、淡い色の雪が流れていく。

祭壇に立つ若い牧師の前には、黒いミンクのコートを羽織った女が座り、紅茶の入った銀のマグカップを両手で持っていた。浅紅の鏡には、体温を失った様な、冷たい顔が浮かぶ。

「何処から来られたのですか」

「棺の中から、と言ったら？」

「私は嫌いではありませんよ」

「冗談？ それとも死体が？」

「冗談の方に決まっています」

「本当に不思議な牧師さんね」

「そう、よく叱られてますよ」

「私は不思議な人好きですよ」

特に貴方のような人は……。

新月の夜、彼女は見つけてしまったのだ。埋葬されたばかりの、幼い少年の墓を掘り返した時、全身を刃物で傷つけられ、棺の中で無惨に凍りついた美しい天使の亡骸を。

許せなかった。

私の死体なのに……。

でも、それ以上に、この芸術的な氷像を創った人間に興味を持った。陶器のような、冷たく白い肌に描かれた赤い肉の線が、この上なく美しかったのだ。荊に捕まった天使は、全身を引き裂く刺に悲鳴を上げながら、涙と血を流して、ゆっくりと冷たくなっていく。その亡骸は、どんなに美しいだろうか。凍えるような蒼白の肌は、毒々しく赤い全身の傷は、痛々しく絡まる緑の荊は……。

出血し、段々と体温を失っていく唇は、どんな悲鳴を上げるのだろう。きつと、賛美歌よりも、それはそれは美しい囁きに違いない。一声、聞いただけで、発狂して仕舞う様な……。

そう、茨の中徐々に冷たくなって、凍りつく天使というのは墓地の暗がりの中。

自然と、女の細く美しい指が下腹部へと伸びてゆく。

「命は何故美しいのでしょうか」

「隣に、死体があるからです」

氷の都トロイカ。

年間を通して雪と氷に覆われたこの街では、気温は常に氷点下を下回る。時としてそれは、棺の中の死体を永遠に留めておくのだった。

淵より来るもの

Scene・18

羊たちのジレンマ

「お姉ちゃん何食べる？ ステーキ？ それなら良いお店があるんだ。人肉使ってるって噂の。どう？」

銀髪の女が首を左右に振った。レストランやカフェが並ぶ西区画のキッチン・ストリート。彼女と並んで歩くウサ耳フード付の白いコートを着た少女は、困ったように眉をしかめた。当たり前です、昼間からステーキなんて、という視線が隣を歩くコバルトブルーの瞳から送られる。

この街は変わらない。

今日もまた雪が降っている。相変わらず、寒い日だった。

通りでは、黒いコートの男がフィッシュ精肉店の紙袋を持って野暮ったく歩いていけば、パン工房ライスのフランスパンを抱えた猫背の牧師が世間話をしながら新聞を買っている。そこから少し離れたカフェ・トムキャロットのテーブル席では、茶髪の女刑事が紙タバコを片手にホットココアを楽しんでいた。

そんな、いつも通りの午後の風景の中を二人も流れていく。

「んー。じゃー、さー。オニオン・ジャックでイタリアンは？」

「おい。テメーら。大人しくしな」

ウサ耳フードの揺れる背中に、三人組の柄の悪い男たちが声をかけた。この街ではよく見かける光景だった。弱者から搾取しなければ、この街では生きていけない。そういう街なのだ。悪は悪でなく、善は善でもない。強いが、弱い。それがこの街では重要なのだ。故に、過剰防衛なんて言葉は存在しない。

毎日誰かが殺され、毎日その報復が行われる。日々はその繰り返しだ。この街はそんな悪循環の様な鎖に繋がれていた。羊は狼に噛み殺され、狼は銃によって駆除される。その銃を造り、売るのは羊だ。

その輪っかは常に回転を続けている。

少し、変わったことと言えば、地下の連中が地上に出始めたくらいだろうか。白いコートの少女は、金色の前髪を弄りながら、そんなことを考えていた。また背後で喚く声がする。吠えなければ、駆除されることもないだろうに。銀髪の女は、白く溜め息をついた。

「なアーに？」

ゆっくりと、二人は振り向いた。それぞれの手にスターム・ルガーとイングラムを携えて。この街の人間に慈悲なんて言葉は価値を持たない。状況は常に、狼か羊かなのだ。彼らは運が悪かったのだろう。武器を片手に地下街から這い上がって、日の光を浴びた途端の不運だった。

男たちの顔色が青ざめる。

「え。ちょ……。待つて」

「聞こえないーい」

「助け……」

「さあ、吠えてみるかい？」

短く、銃声が響いた。

白昼のキッチンストリートに血塗れの死体が三体。仲良く転がった。

氷の都トロイカ。

善も悪もないこの街では、実力のある者がルールである。時にその残酷なまでの能力主義は、悲惨な格差を生み出すのだった。

Scene・19

Dig you later, Baby

白雪が舞う。教会の鐘が鳴った。

茶色い瞳から刺す様な視線を牧師に送る。冷やかな情熱が、白と黒のストライプ地のコートを羽織った女の目に滲んでいた。それは殺意みたく、寒々しく、鋭く、尖って、痛いくらい。

「何故、人は殺し合うのでしょうか」

「彼らは好きなんですよ、人殺しが」

「だとしたら、随分と悪趣味ですね」

「そうですね。私も理解できません」

だからこそ、死体は美しいのだろうか。そして、それを生み出す過程も、愉しいのだろうか。しかし、人間とは多趣味だ。彼女の様に死体のみに美を求める者が存在すれば、彼のように死体を造る過程に美を求める者も存在する。牧師の言葉が嘘だと、彼女は知っていた。

完璧な死体と、完璧な死。

その二者は正反対だ。密接に関連しているが、決して交わることはない。

彼女の空想は、手の中で溶ける雪に似ている。その結晶が溶けることなく、永遠に結晶を留めたままならば、それはどれだけ美しいだろうか。溶けて仕舞うからこそ美しいのか、その形そのものが美しいのか。彼女は迷うことなく、後者を選択するだろう。愛しい人の死体が、永遠に腐敗することなく、永遠に自分の望む姿のままで永遠に隣で眠り続けていたら……。きっと、その関係に言葉なんて無粋なものはいらない。冷たい肌だけが、在ればいい。

夢の様なその時間を生きられたら、どれほど、倖せだろうか。

「私の良い趣味だと思いませんか？」

そう呟いて、女は地下室のドアを開けた。嬉しそうに。
一斉に、何十個という視線が彼女を見る。

薄暗い地下室には、幾人もの少年や少女の死体が整然と並べられていた。どれもルネサンスに見られる様な煌びやかな衣装で綺麗に飾り立てられている。まるで、マダム・タッソーの蝋人形館の様に血の気のない、彼女作品が無表情で。色めき立った女はその中で頬を上気させながら、秘め事を始めるのだった。

下腹部に延びた細い指が、淫らな水音を奏でる。

毎夜。地下の死体置き場から漏れる喘ぎ声に隣人が気付くことはない。そこでは、極彩色の、瞳が静かに彼女を映しているだけ。生気の無い傍観者たちの前で、饗宴は続く。

それでも教会の鐘は、高らかに響くのだった。

氷の都トロイカ。

年間を通して温度が変わらないこの街では、地下室に食糧を保存する。時には、地下室に食糧以外のものを保存する者も存在するよ
うだが……。

Scene・20

祈るひと

昔はね。夏っていうのがこの街にはあったらしいよ。

今は存在しないけれど。

冬が来て、何もかもが変わって仕舞ったんだよ。この街は。雪と、硝煙と、血だらけの世界にね。それは、私たちの選んだ結末だけけれど、あの頃を生きた人間には未来を望んで欲しかった。こんなことを言ったら、それこそ、私の我が侘かもしれない。でも、現在より

も、平和で、安全で、誰もが明日を待つだけの生活を送ることが叶う、そんな未来も存在したと思う。

まったく……。

おかげさまで希望は家出中。

世の中は真つ暗さ。

夕暮れ時の喧騒に置き去られた地下街の礼拝堂で独り。黒いジャケットの胸ポケットから取り出した紙タバコをくわえ、刑事はオイルライターを擦る。炎に白い顔が浮かび上がった。

そして、彼女は問い掛ける。

「けれど、過去を清算したことによって、現在の大切な何かを失うこともある。そうじゃないか」

解答者のいない問いが、そこに反響する。その残響に耳を傾けながら、彼女はオレンジ色の瞳に十字架を映した。こんな結末は、あんまりだ。たとえ、この現在が、もっと酷い結末を回避した結果だとしても。皆、今日を生き延びることに精一杯で、未来なんてどこかに置いてけぼりだ。

昔なら、それが叶わぬ願いでも、祈ることはできた。そうやって明日を見つめることはできた。今はそれさえ許されない。今日という死は、死という今日は、いつ訪れるとも知れないのだ。その不安と、人は孤独に向き合わねばならない。思えば、死神とは、何とも良心的な神だったのではないか。

これから、どうなって仕舞うんだろうね、神様。

昔は、力づくで、導こうとした癖に……。

今は、答えもしなければ、そこに“要る”のかも判らない。

自分勝手なのは、お互い様か。

くすり、と彼女は笑った。

「祈る者がいなければ……、また、神もない、か」

空ろだな。

そんな歴史さえ、人は省みなくなった。空白なんだよ、現在は。この紫煙みたく。ふわり、と微かな匂いだけを残して、静かに消えて。何も無かったかのように、誰も居なかったかのように。呆気なく忘れ去られてゆく。

悲しげに微笑む、埃を被った灰色の女神像を彼女は見上げた。彼女に纏わり付く白い煙が、大気に溶けていく。

「でも、たまには祈ってみるとしよう」

また冬が来ないように。
希望が戻るように、と。

氷の都トロイカ。

四季の移ろいなどの緩慢な変化に気がつかない人は幸せ者かもしれない。その事実が気がついた時、全ては凍りついているかもしれないのだから。日々、蓄積される当たり前という幸福の中から人は、少しずつ何かを落つことし続けている。

ラヴバード、鳴く空

Scene . 21

Ms . Machine - Gun

真夜中のトロイカ、中央区画地下街。

ネオンの灯が煌々と輝く、地下の星空の中に佇む娼館からは、騒々しく銃声が響いていた。

鷲鼻の一家が東部の組織を吸収し、巨大組織としてトロイカの第一線に躍り出て以降、街の均衡は一気に崩れ去った。それまで、箇々の縄張りを守ることに直向きだった彼らは、遊技場を奪い合うことに執着し始めたのだ。この街では、毎日のように何処かが戦場と化している。そして、今宵の鉛弾飛び交う血生臭い舞台の上、真っ白なコートの少女が一人。彼女の手では、ショッキングピンクに塗られたトンプソンとシュマイザーが激しく吠えている。

弾丸がランプシールドを弾いた。

「ほらほらア！　どんどんいくよー！」

「イルゼ姐さん出過ぎです！」

「ああん？　着いて来なきゃ死んじゃうぞん？」

悲鳴と銃声が混ざり合う、大混乱の真っ只中で、彼らは制圧を急いでいた。立ち込める硝煙が鼻先を掠め、鉛弾が頭の横を通り過ぎていく。そんな彼らの前に物騒なものが現れた。それを構えた男が

白い歯を見せて笑う。逃げろ、と誰かが叫んだ。

黒光りする長い銃身を二脚で支えられた“それ”は彼らに向けて容赦なく、弾丸を浴びせる。

雨の様に。

重機関銃。戦場に於いて、広範囲を制圧する為に設計されたその火器の威力はイングラムのようなサブマシンガンの比ではない。瞬く間に吐き出される大量の銃弾は薄い壁にチーズみたく穴を開け、肉を引き裂き、骨を砕いてゆく。不運にも、彼らはこの狭い廊下で、それと遭遇した。

咄嗟にマッド・バニーは左側の部屋へと、ドアを蹴破って飛び込んだ。

逃げ遅れた男がミンチにされる。

「ちょっと、あんなのがあるなんて聞いてねエーゼ？」

「軍から流れたのかと。準備のいい奴らだぜ」

「流石は驚鼻つてところ？」

「ど、どうにかしてくださいよお」

「銃身交換か、再装填に持ち込む？」

「そんな戦力ねーよ」

「だ、よ、ね！ よーし、テメーら覚悟決めな」

「は？ ちょ、姐さん！？」

カール・グスタフ無反動砲を構える。それを目の前の壁に向かつて少女は放った。弾頭は轟音と共に次々と壁を破壊してゆく。何人かにそこを通って機関銃の側面に回って攻撃するように指示すると、白い兎は弾倉を交換し、決戦場へと飛び出した。同時に銃口が火を吹いた。

銃声の奏でる二重奏。

両者の銃弾は空を貫いた。壁に弾痕の軌跡が描かれる。狂った兎は壁を蹴って跳びはねる。そ????な彼女を機関銃の銃身が追いかける。相手は目を見開いただろう。耳を劈くような沈黙の中、壁を走って彼らに迫る少女は、確かに狂った様に笑っていた。弾丸を吐き出し続けるショッピングの銃口。その凶弾は次々と黒いスーツの兵隊たちを、彼らの悲鳴と共に射抜いていく。白い壁に血飛沫が飛んだ。

そうして、無邪気に。

彼女は死体を造り続けるのだった。

「姐さん、今日の報酬です。少ないですけど……」

「気にすんなって。食事代くらいになればいいよ。じゃネ」

「はい。お氣をつけてー!」

「おー、お前らも死ぬなよー」

重機関銃を担いで、少女は地下街の夜空へと溶けてゆく。

氷の都トロイカ。

日々マフィア同士の抗争の絶えないこの街では武器が金より価値を持つ。時にそれは熱烈なコレクターを生むのだった。

Scene . 22

20st Century Riot

「待てコラー！」

「万引きくらいーじゃん！ 人殺すよりは！」

「よくなーい！ 万引きも立派な犯罪です！」

トロイカ西區画、雪の吹き込む路地裏。

白い息を吐いて、白い雪を巻き上げて、一人の少女と一人の警官が人気のない場所を走り抜ける。雨に溶けて固まった雪を薄く覆った今朝のパウダースノー。真っ白な地面に浮かび上がる雪の塊は、まるでミニチュアの大団圓めいていた。

それは踏む度に、ガラス細工みちな音を立てて割れる。

少女の薄汚れた茶色いコートが靡いていた。

「しつこいってばー！ モンテカルロ！」

「ジャンカルロだ！」

「大して変わんなーい！」

その時、凍った石畳に足を滑らせて、派手に少女が転んだ。大丈夫か、と声をかけて警官が慌てて駆け寄る。

少女は彼に銃口を向けた。

震える手でコートの内側から抜いたエンフィールド・リボルバーを構える少女の、黒いスカートから覗く白い左膝には、赤い血が滲んでいた。涙で滲んだ瞳が、彼女にゆっくりと近づく制服警官を睨んでいる。

張り詰めた冷気を纏う空の下、痛々しく。寒々しく。

溜め息ひとつ。

ジャンカル口は彼女の傍にしゃがむと、ハンカチを少女の膝に巻き始めた。

「痛ッ！」

「覚えときな、メリッサ。シングルアクションのリボルバーは撃鉄を起こさなきゃ撃てない」

「そ、そんなこと……」

「知ってたか？」

彼女は首を横に振った。

「……ねえ、ジャンは人を撃ったことあるの？」

「無いよ」

「そうなんだ。ヘタレだね」

「何だと!？」

「でも、あたしと同じだね」

「……ほら、行くぞ。車の中で話そう。ここじゃ寒い」

「どこ行っても寒いよ。この街は」

「そう、……だな」

ゆつくりと立ち上がる少女に背を向けて、彼は空を見上げた。
ふわり、と空から落ちた雪を彼は手の平で受け止め、その手を制服のポケットに突っ込んだ。

「お前も自分のに入れてみるよ。あったかいぜ? 雪だって溶ける」

氷の都トロイカ。

年間を通して凶悪犯罪の絶えないこの街では、小さな犯罪は見過ごされることが多い。しかし、その中にこそ、懸命に生きようとする街の姿があるのかもしれない。

Lost Maiden

買い物客で賑わうクリスマススを控えたキッチンストリート。
フィッシュ店長から貰った、様々な肉の刺さった特性のシュラス
コを片手に白いウサ耳コートの少女が、鼻唄混じりにキッチンスト
リートを闊歩する。

雪の和らいだ日のこと。

快晴の空にちらほらと白い雪が舞う。

そんな彼女は面白そうな現場に出くわした。

「あー！ 警察官があどけない少女を車に押し込んでー！」

「バカ！ そんなんじゃないよッ！」

「見損なっただけ、ジャン。お前がそんな趣味だったとは……。お袋
さん悲しんでるぞ」

「だから違いますってば！」

「お嬢ちゃん怖かったよねー。お姉さんが来たからもう大丈夫だぞ
ン！ はい、シュラスコ」

「あ、ありがとう……」

「話聞けよ！」

パトカーの助手席にぶてぶてしく白い兎が座る。後部座席では、

メリッサがシユラスコを黙々と頬張っていた。そんな少女の姿を、イルゼはバックミラーで眺める。地下街のスラム街の住人かな、と彼女は溜め息をついた。

最近、多いな……。

ジャンカルロの運転するその車は、キッチンストリートの端に位置するイタリアンレストラン、オニオン・ジャックへと向かっていた。

「盗みくらい見逃してやんな。まだ小さいガキじゃん」

「出来るかよ、俺は警官だ」

「けど、そうしなきゃ生きていけないんだよ。この街じゃ。それにどうせ捕まえたって安い食事食わせてやって、地下に放り込むだけだろン？」

「仕方ないだろ、軍警には保護する施設なんてねーんだから。このまま野放しで大人になったら、売りやるか殺しでしか生きていけなくなるってのは、俺だって知ってるよ」

「だったら、それでやってけばいいだろン。マフィアに気に入られたら儲けものじゃん。ベッドの上で死ぬるかもしれない」

「だけどな……」

「なあ、ジャン。この街はお前が考えてるほど優しくねエーよ」

「なら、お前が面倒見てやってくれないか、マッド・バニー。このままストリート・ギャングに置いとけねエーよ」

「やだ。つか、そんなに気になるんなら、自分で引き取ったら?」

「警察官がストリート・ギャングを匿えってか?」

「だから、この街は優しくねエーんだよ……。それに、お嬢ちゃんはどうなのさ?」

「私は……。その……」

「迷ってんならやめときなよ」

「あの、私の両親は、ブラック・エイプリル事件で死にました……。だから私、情報屋になって、私はいつか犯人を見つけて、そして……」

「お嬢ちゃん。復讐なんてくだらない将来設計だぞン?」

「でも、あたしは!」

「ちょっと冷たすぎるぜ、マッド・バニー」

「……お前が言うかよ。しょうがないなア。保護者、見つけてやるよ」

「保護者?」

「任せときなつて」

氷の都トロイカ。

この街には弱肉強食というルールが染み付いる。時にそれはあどけない少女でさえ、地獄へと引きずり込むのだった。

極彩色のあなたたちへ

Scene . 24

White days

その横顔に返り血を。その右手にラドムを。

夕闇に抱かれたこの世界は、あまりにも切なかった。夕陽と血に染まったベッドの上に横たわる全裸の女の死体を彼は眺めていた。似ていたから、買った。そして、似ていたから、殺した。愉しむだけなら、他の女でよかった。ブロンドのショートヘア、瞳の色はブラウン、痩せ型……。何となく、彼女に似ていたから。

自分でも、都合の良い言い訳だと思った。当て付け。仕返し。そういうものかもしれない。結局、今の自分でさえ、父親への単なる復讐でしかないのかもしれない。彼を産んだ娼婦はその日に殺されたという。彼の父親の気まぐれで。この世界はいつもそういう理不尽なことで溢れている。しかし、そんな柵から解放されたいなんて、彼は一度も思ったことはなかった。変えよう、などとも思っていないかった。彼は幼い頃からずっと父親みたいな人間にはなりたくないただけ、切に願っていた。

だから、殺したのだろうか。

オレンジ色の光が染み出す白い窓枠の向こう。茜色に染まる街を彼は直向きに眺めていた。

「すまなかった」

そう呟いた。最期に、彼の父親も同じ言葉を発した。

本当は、認めたくはなかったのだ。世間一般の、父親と母親が揃っている、映画やテレビの中にしかない家庭に憧れていたなんて……。そんなもの、必要ないと諦めていた。自分はマフィアのボスの息子で、世の中の人間とは違う。彼を抱き締める腕が現れるまでは、父親のお気に入りだった彼女は、暇を見つけては彼を可愛がった。ブロードのショートヘア、瞳の色はブラウン、痩せ型で、華奢な肩に浮かぶ鎖骨が艶めかして……。昔、ビデオで見たポーランド人監督の撮った白黒の吸血鬼映画の主演女優に似ていた。思い返せば、あれは酷い映画だった。二人の吸血鬼ハンターが、誘拐された宿屋の娘を助けに吸血鬼の城へと踏み込む。しかし、間に合わずに世界が吸血鬼に支配されてしまうというストーリー。今思えば、ナチス・ドイツがヨーロッパで猛威を奮った暗黒時代の絶望を思わせる映画だった。幼い彼にとっては、自身の父親が吸血鬼に見えたことだろう。孤独の中に隔離される日々。その檻の中で直向きに啄んでいた空想。その真っ只中で、彼は幾度も父親に向けてトリガーを引いていた。

だから、殺したのだろうか。

夕陽は、朱く、彼の青い瞳の中で燃えている。

「……すまなかった」

幾度、この言葉を口にしたらだろうか。

氷の都トロイカ。

この街の寒さに凍りついて、歪んでしまった空想は二度と元の形に戻ることはない。だから、そのままの形で、それは歪んだ未来を描き続けるのだった。

Scene . 25

Black Smile

「ご機嫌よう、アゼル。久しぶりね」

少女は、振り向きながら刀を抜く。

何も言わずに彼女は、それに斬り掛かった。甲高い金属音が響く。激しく敵意を剥く赤いコートの子女の前に現れた、黒いドレスを纏った天使は薄く笑っていた。刃を受け止める彼女の黒い大鎌は、冷たく、鈍い光を放っている。

トロイカ南区角の工場地帯。昼間は活気に溢れているが夜間になるとそこは寂しげなゴースタウンへと変貌する。その月明かりに溢れた路地。

空の隙間からは、眩いばかりの月と星たちが覗いていた。

「その名前で呼ばないで」

「あら、ごめんなさい。クロエ、だったかしら？」

「何しに来たの？」

「ウリエルは元気にしてる？」

「そんなに妹が気になる？」

「そうよ。あなただって私の妹だもの。心配しているのよ」

ふわり、と真つ白な指先が、クロエの輪郭を撫でる。血の様に紅い瞳が彼女を映していた。

刹那、クロエの刀が黒いドレスを貫く。しかし、刃に身体を貫かれてもその天使は微笑んでいた。愛おしむ様に。赤い血を流しながら。

一気に、刃を引き抜いた。

その時、ふわりと、黒い鎌の刃がクロエの首筋に寄り添った。短い悲鳴を發した、彼女の顔が凍りつく。黒い天使が左手に握った黒い棘の様なミセリコルデが、少女の腹部を貫いた。ごめんなさいごめんなさい、と赤いコートを纏った少女の唇は、蠢いている。悪夢に怯える少女みたく、彼女は震えながら。

氷のように冷淡に、黒いドレス姿の少女は問い掛ける。

「せつかちね、クロエ。私、怒るわよ？」

「ごめんなさい、ルシファルお姉様……」

「いい子ね。私、今日は機嫌が良いの」

少女の左右の手のひらを重ねて、真つ黒なミセリコルデを突き刺し、煉瓦造りの壁に釘付けにする。赤い血が、白い腕を伝った。ルシファルと呼ばれた黒い天使はクロエの刀を手にとると、壁に架けられた少女の右腕を　やさしく　切り付ける。小さな、喘ぎが聞こえた。

赤いコートの下の白い燕尾シャツに血が滲む。

次々と天使はクロエの身体中を切り付けていく。その度にクロエの口からは痛みに喘ぐ小さな悲鳴が漏れた。白い雪に、赤い斑点が落ちていく。決して殺さず、愉しむように。時に撫でるように刃を這わせ、時に鋭い刃を突き立て、そのまま振る。露わになったピンク色の乳頭を切っ先で突き、真っ白な乳房を切り付ける。

クロエが悲痛に喘げば喘ぐほど、苦痛の表情を浮かべるほど、その天使の紅い瞳は嬉々と輝いた。

「あなたは治癒が私たちより遅いから好きよ、クロエ。愛しているわ」

「ごめんなさい……」

愉しそうに、ノーブルな顔立ちの天使は微笑んだ。赤いコートは引き裂かれ、白い燕尾シャツは真っ赤に染まる。彼女の剥き出しになった白い肌には、冷たい刃によって赤い線が描かれていく。幾重も、幾重も……。

月明かりは、辺りを青く染めた。透き通るくらいの青に。

ふと、ルシファルがクロエの赤いチエックのスカートの中へ手を入れた。微かに、クロエが甘い吐息を漏らす。

「濡れてるじゃない、クロエ。そんなに嬉しいのかしら？」

「ごめんなさい。お姉様。もう、許して……、ください」

「夜は長いよ。愉しみましょう、アゼル。月しか見てないわ」

堕天使は黒く笑った。

氷の都トロイカ。

神話に語られる天使は必ずしも愛に溢れているとは限らない。否、その愛が強すぎる故に、狂って仕舞う者も存在するのだった。

S c e n e . 2 6

S c a r l e t a p p l e

幾つも並ぶ赤い椅子の一脚に座って彼女は虚空を眺めていた。静かに、靴音が響く。後を追う様に、紫煙が棚引いた。誰もいない映画館の中で赤い髪の男が訊く。何も映っていない、弾痕だらけのスクリーンと向き合う栗色の髪の女の方を、ゆっくりと振り向きながら。

ねえ、刑事さん。

「神様に会ったことは？」

「無いよ。こんなんだから、嫌われてるのかもね」

「だろうね」

「あっさり言うね。君さ、そんなんだから友達いないんだよ」

「それは関係ねエーだろ。つーか、どうしたの？ その腕」

「この間、シャウクロスの娼館で抗争あったの知ってる？ あれでね、吹っ飛んだ」

ひらひら、と手首から先のない左手を彼女は振って見せた。茶目っ気たっぷり。

無惨な沈黙が横たわった。

赤い髪の男は、スクリーンの方へと向きを変える。彼の背中を見て、栗色の髪の刑事は溜め息をついた。脚を組み直す。黒いジャケットの袖から覗く、彼女の左手には白い包帯が巻かれていた。ジャケットのポケットから紙タバコを抜き取り、ライターを擦る。運の良い方なのだ。あの抗争の後始末を強行した際、四人の部下が殉職した。いつ、どこで、誰が、突然命を落とすかも分からないこの街で。今日、ここに存在しているということが奇跡だった。だから彼としては、心配だったのだろう。奇跡なんて、何度も起こるものではないのだから。

床に転がるジュースの瓶を蹴って、怪訝な顔で彼は尋ねる。

「……辞めれば？ 仕事」

「ジョバンニ君。それって軍警辞めて君みたく始末屋やれってこと？」

「あらら、バレてた？」

「とっくに」

「かないませんなア……。つーか、いいの？ 寝てなくて」

「このクソツタレな街の治安を維持する、クソツタレな仕事がありますので」

「何それ」

「私は大丈夫だよ。何ならこのあとデートにでも誘ってみる？」

「おあいにくサマ、年上には興味ねエーよ」

「このロリコンめ……」

「うるせエー、年増」

「酷いな」

紫煙を吐いた。へらへら、と彼女は笑っている。

溜め息をひとつ。赤い髪の男が、ふわり、とはねる栗色の髪を抱き寄せて、赤い唇にキスをする。

歩き去っていく靴音を聞きながら、女は仄かに濁った蛍光灯を眺めていた。

その苦味は白く、漂っている。

氷の都トロイカ。

確証のないいつかを夢見て死んでいった者は、その夢に縛られ続けて生きる者の悲しみを知らない。だからこそ、人は誰かを無防備

で愛せるのだろうか。或いは、愛しているからこそ。

ブラック・エイプリル

Scene . 27

BLACK APRIL

正午過ぎのキッチンストリートは混沌としていた。通り沿いのあちらこちらの店々で、エスニックなスパイスや、鉄板の上で跳ねるハンバーグ、そして、焦げたチーズの美味しそうな匂いが空腹を誘っている。カフェ・トムキャロットのカウンターでコーラを片手にホットドッグを頼張る冴えない警官の後ろで、不健康そうな牧師と退屈そうな女医の二人組が食後のコーヒーを嗜み、その前の通りを栗色の髪的女が紙タバコを蒸かしながら今日のランチを物色している。

束の間の平和な時間。

窓の外の白い世界を、ゆっくりと。白い雪は流れてゆく。

そんな稼ぎ時のオニオン・ジャックのドアに、黒いコートの殺し屋が手を掛けた。彼の背後に黒いハンチング帽を被ったローティーンの少女が立つ。奇妙な組み合わせだ。そんな彼らに、白いコートの少女と銀色の髪的女という、また妙な組み合わせの二人組が親しげに声をかける。

「あ、おっさん。それにメリッサちゃんも。ハロー」

「こんにちは、マッド・バーニーさん」

「イルゼでいーよ。おっさん達これからご飯？」

「まあね」

押し開けたドアの隙間から、濃厚なトマトソースの匂いと暖炉の熱が、波の様に襲いかかってくる。殺し屋と少女の後に続いて、イルゼと銀髪の暗殺者がドアをくぐった。まずまずの賑わいを見せる店内。窓際のテーブルでは赤い髪の男が執拗にボンゴレをフオークに巻きつけている。彼の横を摺り抜けて、彼女たちはホールの奥のテーブルに座ると一様にメニューを広げた。

メニューを眺めながらの、楽しい品定めが続いている中、銀髪の女が遠慮がちにイルゼの肩をつつく。ひょいと、白兔が顔を向けると、彼女はメニューの中の、ひとつを指した。
赤い瞳を動かして、イルゼが覗き込む。

「オニオンスープの玉ねぎ抜き……。ああ、それただのコンソメス
ープだよ?」

その説明を聞いたオリガは、残念そうな視線を再びメニューに向ける。

ちらちらと緑色の瞳を泳がせて三人の様子を窺っていた、茶髪の少女がメニューを閉じた。意を決して切り出す。

「あ、あの。皆さんはブラック・エイプリル事件のこと、何か知っていますか?」

「ブラック・エイプリル……、確か三年前の?」

「こんな時に変な話をしてすみません。でも、犯人についての情報はどこにも無いし、ジャンも教えてくれなかったし……」

「復讐のこと、まだ考えてたの？」

「私は、ただ知りたいんです。何で、私の両親が死んだのか」

「あの事件は無かったことにされてる。そういうことは、詮索しない方がこの街では賢い生き方ってものさ。ジャーナリスト気取りで死んでいった奴も大勢いるよ」

「おっさんの言う通りだな」

「……どうしてですか？ 皆さん、知ってるんですよね？」

「知ってても、多分、君の知ってることと変わらないと思うね。あの事件の実行犯は全員死んだ。そんな噂だってある」

「そんなはず……。どういうことですか？」

その問い掛けに三人は何も答えなかった。そうして黙々と運ばれてきた料理を食べ進めるだけの静かな昼食会が始まる。エメラルドグリーンの瞳が、悲しげに俯いた。

ブラック・エイプリル事件。

雪の日だった。

三年前のトロイカ中央区のファッション街エイプリル・ランでそれは起きた。休日で賑わう白昼のブティック街に突如として現れた殺戮者たちは次々と買い物を射殺していった。まるで、ウィンドウショッピングを楽しむ様に。悲鳴が消え、血のカーペットが敷か

れた頃、殺戮者たちは通りの店々に火を放った。死者は五十六人を数え、その中には現場に急行した警官も含まれている。

黒い四月事件と呼ばれ、甚大な被害を出した悲劇的な事件にも拘わらず、軍警察、及び軍部は事件について沈黙し、またマスコミにも圧力が掛かったため犯人や事件の詳細は未だ発表されていない。それが表向きの概要だった。そうして何の真相も判らないまま、このブラック・エイプリル事件は闇に葬られて仕舞う。誰が何のために起こしたのか。その答えも、炎と共に消えた。惨劇の跡には焼け焦げたブランドのバッグや靴と、焼け焦げた死体しか残っていないかった。何もかも黒に染まって

銀色のフォークを皿の上に置く。

椅子を鳴らして、イルゼが立ち上がった。

「おっさん。ちょっとメリッサ貸して」

「ああ、かまわないけど？」

「ありがとう」

誰も踏み入れていない新雪の絨毯に黒いショートブーツで足跡を刻む。二人の間に会話はなく、少女は白い兎の跡をなぞった。白い空がすぐそこにある。ふわり、と雪の舞う中で、メリッサは両手で銃を構えた。

その翡翠色の瞳は真っ直ぐに銃身の向こうの白兎を睨む。

エンフィールド・リボルバーの撃鉄を起こした。シリンダーが、ゆっくりと回転する。その音を聞いて、イルゼは足を止めた。

ハートを象った銀色のピアスが彼女の右耳で小さく揺れている。

「イルゼさん。教えてください」

「何を？」

「ブラック・エイプリルについて。何があったのか。どうして誰も知らないのか。誰がやったのか」

「知らないって言っても？」

「何でもいいんです。教えてください。お金なら何とかします」

「知ってどうすんの？」

「教えて」

「あさ。犯人探し出して、復讐して、それでどうなるって言うのさ。過去は変わらないぞん」

「変わらなくなっただけいいんです。私の生きる目的だから」

「誰もそれを望んでなくても？」

「私は自由です。誰かの望む形の私になんか、ならなくていい」

「ふーん。……じゃあさ。それ、撃てる？」

「え？」

「そのトリガーを引けるかって聞いてんの」

シヨッキングピンクのイングラムを右手に、白兔は振り返った。その瞬間、獰猛な銃口が砲火を上げる。その毒々しい銃身から吐き出された弾丸は、メリッサの頬を掠めていった。パラパラ、と少女の茶色の髪が白い雪の上に広がる。

エメラルドグリーンの瞳を見開いて、少女は立ち尽くしていた。ゆつくりと、イルゼがメリッサの元へ歩み寄る。そして、彼女の額にイングラムの銃口を突き立てた。

降りしきる雪の中で、真っ赤な目玉の白い兔が、可愛らしく、そして、残虐に笑う。

「ねエ、そんなんで人殺そうなんて。お嬢ちゃん、死にたいの？」

一気に蹴り上げた。

エンフィールド・リボルバーが少女の手を離れる。イルゼの膝が少女の腹部にめり込む。ゆつくりと少女は崩れ落ちた。白い雪の上に横たわるメリッサの腹部を再び白兔が蹴る。少女の顔が苦痛に歪んだ。激しく咳き込みながら嘔吐するメリッサの髪をイルゼが掴んだ。彼女の頭を持ち上げ、恐怖と痛みに歪んだ顔を覗き込む。涙を溢れさせる翡翠色の瞳を愛おしそうに彼女は見つめて、少女の頬にシヨッキングピンクの銃口を突き付けた。

「人は自由だよ。だから、わがままで、傷つけ合う。クソツタレな世の中だろン？ いっそ、人の幸せになんか口出ししないで、自分勝手に生きてりゃいいのにさ」

「じゃあ、何で……」

「自分勝手に、わがままだからね。いいい？ この街じゃ欲しいものは何でも奪うしかねエーんだよ」

「そんなの解ってる。でも……」

「吹っ切りなよ、メリッサ。見ててあげるから。終わったらオニオン・ジャックでご飯でも食おーぜ」

「イルゼさん……」

氷の都トロイカ。

様々な思惑の渦巻くこの街では触れてはならない闇が存在する。もし、そこを覗こうとしたなら、その先には死が待ち受けているのだった。

ハロー、クリスマス

Scene・28

JINGLE BELLS・Rin・riri・n

いつもの様に雪の舞うトロイカ西区画キッチンストリート。

白い兎は今日も跳びはねる。ショッキングピンクに彩られた毒々しいイングラムとシュマイザーを両手に。赤い屋根の上を銃声と共に駆け抜けて。

彼女の背後には、クリスマスの陽気に誘われて地下街から溢れ出したギャングたち。銃弾の飛び交う深夜。煌々と輝き続けるイルミネーションがこの街をお祭りムードへと駆り立てる。夜空を引き裂いたイングラムの銃声から、久しぶりに飾り立てられた街のバカ騒ぎが始まった。街中で、鉛弾の花火が打ち上げられる。

「ほーら、ほらほらア！ こっちだぞん」

「クッソ！ ちょこまかと」

「じゃじゃーん！ 今日は新しいの持って来たーっ！」

嬉しそうに笑う彼女の手には、またもやショッキングピンクに塗られたシカゴ・タイプライター。ドラムマガジンを装着した悪趣味なトンプソン・サブマシンガンは、無尽蔵に鉛弾を吐き出し続けた。その凶悪な弾丸は、次々と追走者の肉を裂いて、骨を砕いて、彼らを死体へと変えてゆく。禁酒法時代のマフィアに愛され、シカゴの

ピアノと称されたその美しい銃声が、聖夜のテンションをヒートアップさせた。

街の沸点は近い。そこら中で歓声と悲鳴が上がる。ショーウィンドウの硝子は碎け散り、水晶の様に散らばった。混沌にざわめく夜。今にも街中に、暴虐の焰は引火しそうだ。

調子はずれの白兔が、真っ赤な瞳を転がした。更にトリガーを絞る。

「アッハハハ！ もっと派手にパーティーしようぜッ！」

零れ落ちる葉莢。

転がる死体。

硝煙に曇るトロイカ。

赤い髪の方がネクタイを緩め、グロックとベレッタの銃爪を締めた。背を向けて逃げ惑う、セクシーに着飾った女たちが次々と倒れてゆく。悪魔抜いだと彼は笑った。小悪魔たちを退治しているのだ。と。十字架を切りながら。

イヴの夜、仕事終わりのアフター・ファイブはこうでなくてはならない。刺激的な夜だ。しかも、今日はクリスマス。とんでもないことをやらかす。それが流儀だ。

深夜へと駆け上がる時計の白い文字盤に弾痕が踊った。

ミラーボールの廻るダンスホールで紫煙と舞う。寒空を劈く悲鳴が、彼の耳には心地良い。深呼吸する様に、大きく息を吸い込んだ。ふわふわとクリスマスローズの花片が舞う、雪の様に白く。その狂気に飾り立てられた血塗れの舞台の上で、硝煙と血に酔いしれた弾丸が、兵隊の描かれたボトルを撃ち抜いた。

ショットグラスにジンを。

左手にはラドム。

撃ち抜いたライムの果肉を散らしてドライに仕上げる。場末のバーで浴びる酒にしては上出来だ。床に横たわる男のカーキ色のコートに、果汁が飛んで、染みをつけた。

彼は薄く笑う。

「飲めよ。今夜は語り合おうじゃないか」

仕事の出来ないヒットマンは殺される。それがこの街の伝統的なマナーだ。処刑されるのは珍しいことではない。今回は床の上で死ねたのだ。今、君が寝転んでいるその場所は、冷たい雪の上より、随分とあたたかいだろう。蓄音機から流れるジャズと、辺りから響き続ける銃声に耳を傾けながら、死体の隣で彼はマティーニのグラスを傾けた。

ハイド・アウトの重厚なドアが開く。

彼は銃口を向けた。

「メリークリスマス、牧師様」

「こんばんは。ミス・ヘルガ」

「相変わらず誰もいませんね」

「ハハハ。いつものことです」

今宵はクリスマスだというのに、賛美歌なんて聞こえない。そん

な寂れた教会の扉を黒と白のストライプ地のコートを纏った白い顔の女が押し開けた。蠟燭の光に揺れる雪が、幻想的に礼拝堂の中を照らしている。祭壇を飾るクリスマスローズ。

それら白さは淡く、仄かに、冷たく、やわらかく。

マシユマロみたく。

或いは、出来立ての死体の肌の様に。

靴音を響かせて、女は牧師の前に座る。街の喧騒を遠くに、牧師は降誕節の祈りを捧げ始めるのだった。彼の足元に隠された少年の死体は凍り付き、その胸元には十字架に架けられたキリストのデザインされたナイフが、深々と突き立てられていた。

祈りを終えた牧師に、赤ワインを差し出して、少し微笑みながら女は問い掛ける。その吐息に、蠟燭の焰が踊った。

「こんな時、彼は何と言うの」

「そうですね。隣人を愛せと」

黒い夜空を背景に、ガス灯の焰が儚く、静かに揺らぐ。

仄かな雪明かりに瞬く白い刃。日本刀を手に、黒髪の少女は赤いコートを翻した。こんな月夜には、紅い色が良く映える。彼女を囲む武装した柄の悪い男たち。舐める様に彼らを見つめて、妖艶に微笑んだ。

火花が飛ぶ。

ふわり、と彼女は跳んで、丁々発止と斬り荒ぶ。薄暗い路地裏での惨劇。首を失った死体を滅多差しにする少女の顔は、喜びに満ちていた。

少しの悲鳴はいつものこと。今夜はクリスマス。少々騒がしいのはいつものこと。

「足りないよ……」

深紅のコートの内側からモルヒネを取り出すと、その女は自らの左腕に針を突き刺した。白く染まった感嘆の吐息が漏れる。恍惚に微睡む緋色の瞳が、ぼんやりと雪を眺めていた。その内、血染めの手のひらを見つめて、少女は小さく笑った。くすくす、と。血雪に濡れる雪を踏み締め、彼女は街の闇の中へ消えて行く。無造作に、地面に転がった注射器を踏み付けて。

ガラスの割れる、軽い音が鼓膜を震わせた。

頭上で弾けた窓から、ガラス片が幾重にも碎け散り、一斉に降り注ぐ。ひよい、と黒いコートの男はそれを躲した。やれやれ、と髪を掻き上げる。

彼が見上げた窓から三月の兎みたく、狂った少女がブロンドの髪を靡かせて飛び出した。

「おっさん。退いて退いてっ！」

「おっと」

「やあ。また会ったな」

「こんな日に合うなんて、ツイてないねえ……」

「お互い様だろー……。って！ 三時の方向から銃撃だー！ しつこいぞ、お前らー！」

「巻き込まないでくれない？」

「まあ、いいじゃん。てゆうか、メリークリスマス」

「もう最っ悪……。ほんっと」

くるり、と彼らは振り向いて、迫る追っ手に銃口を向ける。銀色の鷹が嘶き、シュマイザーが咆哮を上げた。彼らの放った鉛弾の雨は、あっという間に血走ったチンピラたちを洗い流す。

そこは綺麗さっぱり。死体の山。静寂と、呻き声と、硝煙と。白い雪に染み出した血液は、ストロベリー・シロップのようで。そんな彼らの横に、雪煙を巻き上げて、一台のパトカーが急停車する。

車窓から制服の、冴えない警官が顔を出した。

「こらあー！ テメーら！ 日が暮れたらドンパチャめてお家に帰りなさい！ クリスマスだぞ、今夜は！」

「やつほー！ ジャン！ メリークリスマス！」

「……つたく、乗れよ。これ以上殺られたら堪んねエーぜ」

「君も大変だねえ」

「いやいや、おっさんよりはマシだよ。ミハイルさん」

「あらら。知ってたの」

「あんたの伝説は有名だからね。つか、どちらまで？」

「オニオン・ジャック！ 俺達がタマネギをジャックする！」

「へいへい。了解つと」

再び、雪を巻き上げて、パトカーが街路樹の横を走り抜ける。赤いテールランプが、真夜中のトロイカを縫い合わせていく。

そのレーザーサイトの赤い点に狙撃手は神経を尖らせた。

風は無い。聞こえるのは、サンタ・クロースも逃げ出しそうな、街の喧騒だけ。白亜のテラスからヴィントレスを構える。その銃口は、クリスマスに沸き立つ一軒家の中を覗いていた。本日のターゲットは二階の窓際で、バーボンのグラスを傾けている。いい御身分だ。こんな夜だから、だろうか。しかし、死ぬ前に呑む酒が、そんな安物とは嘆かわしい。

冷ややかに、彼女はスコープを覗いていた。ゆっくり、と引き金に指をかける。

男の後頭部にレーザーの赤い点が浮かび上がった刹那、それは鉛弾と結ばれた。

スコープの向こう側。破碎した窓ガラスの先。弾け飛んだ頭は西瓜じみていた。飛び散った血飛沫が、クリスマスツリーを紅く染める。

こんな日なのだから、葉巻の一本でもプレゼントしてあげましょう、と。女は葉巻を一本、彼の家の玄関先に転がした。

J o y e u x N o e l .

メリークリスマス、と記されたメモに、ピンク色のキスマークを

添えて。

氷の都トロイカ。

冷たく硬い氷さえも溶かして仕舞う様な、聖夜の熱気は人々を暴虐のお茶会へと誘ってゆく。そこら中で繰り広げられる狂ったパーティーは、朝を迎えても尚、終わることはない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2441z/>

TROIKA

2011年12月26日20時50分発行